

# 松村通信第 1 5 8 号

3月23日  
松村勝弘

## 国民国家・想像の共同体？

**近況** 前回書いたように、2月16日は住野さんの喜寿を祝う演奏会でした。大阪市中央公会堂3階の特別室で行われました。チェロの演奏に聴き入りました。終了後懇親会があって、これも楽しく過ごすことができました。



3月12日は経営学部校友会役員会だった。さらに15日は松村ゼミ15期生の同窓会でした。6人の参加でしたが、四条鴨川端の「東

華菜館」で楽しくお話しできました。ここのエレベータ(写真参照)は文化財級の古いもので、手動式のような感じで、店の人が手動で動かしているって感じのものでした。

22日は経営管理研究科つながりの喜望大地役員会、23日は立命館大学会計学研究会OB会と続く。25日は立命館大学出身の元阪神の監督吉田義男さんをしのぶ会と続く。ここのところ、立命館大学校友つながりで出かけることが多い。

**想像の共同体** とにかく、雑読の今日この頃です。そんな中で、ベネディクト・アンダーソン<sup>1)</sup>著、白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(書籍工房早山、2007年)が、特に考えさせられたので紹介しておきたい(以下、引用頁数のみの場合、同書の邦訳の頁数である)。その出版年から分かるように、邦訳がでてからすでに20年近くなる。その原書は1983年に出版されている。そして世界中で話題になった本である。残念ながら私は読んでなかった。専門外ではあるが、面白い本だった。

邦訳もかなり以前に出版されたいるので、これに関連して書かれた論文・書評・その他文章も多い。立命館蔵書検索システムで「想像の共同体」というタームで論文を検索してみると、重複もあるので必ずしも的確ではないけれど、130件ヒットした。関連して論じられた日本の論文などが結構多いことが分かる。主内容は、「想像の共同体」として国民国家が成立するというものである。国民国家について、ウィキペディアによると、「18世紀から19世紀にかけて、オランダ・イギリス・フランスにつづいてヨーロッパの他地域でも市民革命が起こり、また、英仏をモデルとした近代化が進められた。こうして成立した国家が『国民国家』であるとされる。」

アンダーソンは、国民はイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である、という(24頁)。ある人が「自分は日本国民である」と思うからそうなのであって、素のままの人間はただの人間であった、日本国民だとかに規定されていない。江戸時代に生きていた人は自分が日本人だとは意識しなかったであろう。何とか藩のどこそこに住む農民だとか思わなかっただろう。ところが今や、日本国内に住んで毎日テレビを見たり新聞を読んだ

りしている人達は、京都に住んでいても、一度も会ったことのない青森に住んでいる人と日本国民であるという意識を共有している。上記に続けて、アーネスト・ゲルナーから次の引用をしている。「ナショナリズムは国民の自意識の覚醒ではない。ナショナリズムは、もともと存在していないところに国民を発明することだ。」(24頁)我々は日頃、自分が日本人・日本国民であることを当たり前のように思っている。そうではない。それは作られたもの・刷り込まれたものですよ、と教えている。

**国民国家成立前・出版資本主義** 国民国家が成立する前、近代より前はどうかであったか、アンダーソンはそれから説き起こしている。当時は例えばキリスト教という共同体の一員であった。あるいは王国・帝国の民であったという。ただし、国民としてではなく、共同体の一員としてではない。周縁のひとりとしてであった。キリスト教や王国の力が低下する中で、産業の発展とともに、中産階級が興隆し、資本主義が発達してきた。アンダーソンは、ここで国家・国民・国民意識が出てきた物質的文化的背景として「出版資本主義」をあげている。

ローマ・カソリックが力をもっていたころ、聖書はラテン語であった。キリスト教諸国の聖職者・知識人はラテン語で聖書を読み、神と大衆・非識字者との間の仲介者であった。このようなキリスト教では聖職者はラテン語を介してヨーロッパ中の聖職者と共同体を形成していた<sup>2)</sup>。「王国」の場合でも同様に王権の正統性は神に由来し、王は神と民衆を媒介した<sup>3)</sup>。ラテン語聖書の出版はいわばベストセラーであった。でも読者層に限りがあった。ルターはドイツ語という俗語で聖書を説いた。これで読者層が広がり出版資本主義は広がっていった。辞書編纂革命<sup>4)</sup>もあり、「知識人・中産階級、遅れて大衆は、『国民的出版語』の話者・読者であるという意識＝国民意識をはっきりと抱くようになり、民衆的国民運動が起こった(第V章)。……王朝は、民衆的国民運動に挑戦し自らの権力を保持すべき、特定の俗語を『俗語国家語』に採用し、民衆の間に広がっていた国民的帰属という意識に歩み寄った(pp.146,148)。」<sup>5)</sup>こんな経緯で各地での俗語が、プロイセンなどで国民意識を醸成した。フランス語、英語、スペイン語などの俗語も同様である。「人間の言語的多様性の宿命性、ここに資本主義と印刷技術が収斂することにより、新しい形の想像の共同体の可能性が創出された」(86頁)という。

**クレオール** アンダーソンは、ネアンを引いて「中産階級と知識人のおちつきのない指導の下に、民衆の階級的エネルギーを新国家支持へと動員し誘導するという形態をとった」(93頁)が、南北アメリカは中流階級はそれほどいかなかった。そこではどうして国民国家が形成されたのか。そこでは言語は、英語、スペイン語、ポルトガル語であって、その地独特のものではなかった。「ブラジルにせよ、アメリカ合衆国にせよ、あるいはスペインの元植民地にせよ、言語はこれらの国々をその本国から分化する要因ではなかった。」(92頁)絶対主義の植民地帝国は行政上の区分をした上で、そこでの役人は、植民地生まれの役人[クレオール]と、本国生まれの役人とであったが、前者は差別されていた。ここにクレオール共同体が生成し、現地新聞などで地域的に結束し、本国から独立し国民国家を形成していくことになった。ここでの国民国家形成において、「経済的利害も自由主義も啓蒙主義も、それ自体としては、これら旧体制の強奪から守るべき想像の共同体の種類また形態を創造することはできなかつたし、創造しなかつた」が、「遍歴のクレオール役人と地方のクレオール印刷業者は、決定的な歴史的役割を演じたのである。」(111頁)

**俗語・国語、行政区分** 19世紀から20世紀にかけて、東欧から北欧、そしてロシアに至るまで国民国家が成立した。ここでも言語(俗語・出版語)が大きな役割を果たしたいわれる。「ラテン語が俗語出版資本主義によって打倒されてからすでに二世紀にもなろうという一九世紀のヨーロッパでは、こうした連帯は俗語の通用する範囲の限界いっぱいまでに達していた。」(132頁)

第二次政界大戦後、アジア・アフリカの植民地でも、独立が相次ぎ国民国家が成立していった。それまでの国民国家形成の形がモデルとして活用されたという。「近年の『植民地ナショナリズム』の起源について考察するとき、我々はただちに、最近の植民地ナショナリズムと初期の時代の植民地[南北アメリカ]ナショナリズムとの中心的類似性に気がつく。それは、それぞれのナショナリズムの領域的広がり、それに先立つ帝国の行政単位との一致である。」(189頁)インドネシアなどその典型であろう。インドネシアは島々からなる国で島の数も極めて多くて広い。しかも人口も多く、民族も多様で、言語も多様であったが、オランダ領東インドという地域に誕生した国であった<sup>6)</sup>。

メディアが発達し、コミュニケーションが

容易になるとともに、また、国民国家がモデルとなり、国民国家が一般的になると、多言語国家も容易に形成される。スイスなど、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンス語のそれぞれの地域がありながら、国民国家となっている。「スイス・ナショナリズムは、国民が国際的規範となりつつあった時代、それまでよりもはるかに複雑なやり方で国民というものの[ネーションネス]を『モデル』とすることができるようになっていた時代、世界史のそうした時代に、起こったのである。」(217頁)世界的にナショナリズム全盛になって、やっとスイスにナショナリズムが生まれたという。

**ゲマインシャフト** アンダーセンのこの著書の原題、Imagined Communities、である。コミュニティはドイツの社会学者、テニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を想起させる。コミュニティの独訳がゲマインシャフトであることは周知のところである。ゲゼルシャフトは通常機能体組織、ゲマインシャフトは共同体組織と訳されることが多い。本書を紹介する論文でも「国民(ネーション)という共同体が近代になってから人々に想像されることで初めて出現したという主張」<sup>7)</sup>であるといわれる。

共同体というと、日本企業が制度的には会社というゲゼルシャフト・機能体組織であるのに、ゲマインシャフト・共同体組織のごとくであり、それが日本企業成長の原動力となったのではないかという主張が見られるので、経営学的にも関心をもたざるを得ない。しかも、バブル崩壊後日本企業も機能体組織になってきているのではないかとも言われている。そんな中で、改めて共同体組織としての再興が叫ばれてもいる。

アンダーソンは、国民は近代になってから形成されたもので、ネーションは想像によって形成された共同体であるとする。しかも「ナショナリズムと宗教的想像力との、死の問題を説明する。」<sup>8)</sup>この前の戦争がそうであったように、国のために「死ねる」のである。「ネーションに見出される『ゲマインシャフトの美』、すなわち『それが選択されたものではないというまさにその故に、無私無欲の後光が差している』[から]『宿命』……『純粋性』……『崇高さ』へとつながる。」<sup>9)</sup>高度成長期日本企業で「24時間働けますか」<sup>10)</sup>という言葉が流行語になったのを思い出す。「会社共同体」という実感があった。本書を参考にして今後の『会社共同体』のゆくえ<sup>11)</sup>に注目していきたいと思っている。

1) 著者ベネディクト・アンダーソンは1936年、中国雲南省昆明市に生まれたイギリス人で、2015年になくなっている。専門は、比較政治、東南アジア、とくにインドネシアの政治であり、アメリカのコーネル大学で教えた。2015年12月13日、滞在先のインドネシア・東ジャワ州バトゥのホテルで、睡眠中の心不全により死去したという。

また、「アンダーソンは……『言葉と権力』のなかで、自分のことを、『中国で生まれ、3つの国(中国・イギリス・アメリカ)で育てられ、時代遅れの発音で英語を話し、アイルランドのパスポートをもち、アメリカに住み、東南アジアを研究する』と自己紹介している」(<https://1000ya.isis.ne.jp/0821.html>)という。

2) 考えて見れば、江戸時代までの日本でも、儒学者は漢語を通じて中国、朝鮮の知識人とある種の共同体を形成していたとも言えるのではないか。

3) 藤岡達磨「『想像の共同体』論の再構成:【知識-制度-実践】による架橋の試みに注目して」『社会学雑誌』35,(2019)、171頁。

4) 「19世紀は、俗語の辞典編纂、文法学、言語学、文学者の黄金時代」だという(<https://chanomasaki.hatenablog.com/entry/13145924>)。

5) 性川波都季「『想像の共同体』試論 ナショナリズムにおける言語の役割に着目して」『言語文化教育研究』第3巻、2005年、239-240頁。

6) 「少なくともスハルト将軍が暴力的に前ポルトガル領東チモールに侵略するまでは、その国境線は、オランダの最後の征服(一九一〇年頃)の結果として残された境界線そのものであった。」(196頁)

7) 前田健太郎「宗教からナショナリズムへーベネディクト・アンダーソン著『想像の共同体』」『岩波書店のWEBマガジン「たねをまく」』2024.05.07、<https://tanemaki.iwanami.co.jp/posts/8020>。

8) 新倉貴仁「ナショナリズム研究における構築主義——ベネディクト・アンダーソンの知と死——」『社会学評論』59巻3号、2008年、592頁。

9) 同上、593頁。

10) 「24時間働けますか」は、栄養ドリンク「リゲイン」のCMで使われていたキャッチコピー「24時間戦えますか」のことで、バブル経済の真っ盛りの1980年代末に話題を呼んだ。

11) 稲上毅「『会社共同体』のゆくえ」『大原社会問題研究所雑誌』第599・600号、2008年10・11月)

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。  
皆様のご意見を歓迎します。HP  
(<http://www.ritsumeai.ac.jp/~matumura/>)もご覧下さい。  
フェイスブックもやっています。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい  
([matumura@mba.ritsumeai.ac.jp](mailto:matumura@mba.ritsumeai.ac.jp))。